

光栄の森

2019年11月 毎月1日発行 第135号
発行者 光栄プロテック 中川

11月に向けて

代表取締役 三田雅憲

今期は、おかげさまで本社・千葉工場の両方に忙しい毎日が続いております。新しい社員も増えて仕事だけでなくその指導も大変ですが、人を育てることは自分を育てることに繋がりますのでよろしくお願ひします。
今月は愛知と大阪で見本市展示会が開催されます。営業部の諸君も大変ですが、どうぞ顧客のニーズや新しい出会いを求めて頑張ってください。さて、4年前の10月に当社は千葉白井工場をオープンさせたのですがその当時に私が書いた社報を今月は皆と読み返していきたく存じます。

朝夕が少し寒くなってきており、工場でも咳をこじらせている諸君も出てきておりますが気を付けて乗り越えていってもらいたく思います。

今この原稿を千葉の工場へ向かう電車の中で書いております。

先般10月10日無事に竣工式を迎え、社員諸君をはじめ多くのお客様においでいただき千葉白井工場のスタートを切ることができました。関東の地は当社にとって本当に更地ですので、すぐに仕事をもってくださるお客様がいるわけでもなく、竣工から2週間、ペンキ塗りや掃除、壁紙貼り、少しのサンプルを作成するような日々が続いております。2名の社員にも時間をどう過ごしたらよいのか？リーマンショック後の時を思い起こす厳しさをこちらで感じております。

厳しさを体験せねば感謝の気持ちはわいてこないといわれますが、この時期のこの感じを忘れることなく、お客様やお世話になった人々に接していきたく存じます。大阪にしていると仕事が入るのが当たり前で、仕事がない時にお客様に電話を入れると「こんな仕事があるからやってくれ」と簡単に言ってもらえるのも、会長をはじめとする先人や先達が信用を築き守ってくれたからこそだと感じております。

先般「光栄に仕事を入れたが対応が遅かったので、今ある仕事を入れられない」とお客様が述べておられたという声を営業から報告を受けました。自分たちは一生懸命やっているつもりでも、受け取る相手の気持ちは少し違うんだということに改めて感じました。

日本ホテルの名誉料理長の中村勝宏さんが次のように雑誌で述べられていました。

“モノづくりは、謙虚な気持ちがなければ絶対にダメだと思います。いま、自分がここまでこれたのは、自分ひとりの力ではなく、たくさんの方々の有形無形の支えのおかげだと感謝できるかどうかです。それがわからないで「俺が俺が」と言い始めたらその時点で終わりですよ。やはり僕らの仕事もそうでしょうが、最初から面白いということは、あり得なくて特にスタートは、厳しいものです。当然ながらだけどその厳しさに耐えてむしろそこから仕事の面白さを自分で見つけて、いってこつこつとやる。これが本物。”

とおっしゃっています。言い訳をせず、言葉だけで取り繕わず、誠心誠意仕事に向き合うことの大切さを述べられているのだと感じます。

私も知らず知らずに、あたかも自分の力だけでここまで来たような錯覚を起こして偉そうな気持ちでいるのではと改めて反省し、謙虚な気持ちを持ち、ここ千葉でもう少し頑張っていこうと考えております。

あれから4年たち、今、千葉工場は営業・事務・工場全員で7名の地元の社員で頑張ってもらっています。自分たちの工場として日々技術を学んでいる諸君に本当にエールを送りたいと思います。又、大阪本社も来年50年を迎えます。本社は16名の社員が頑張ってくれています。心技体のバランスのとれた職業人になるという志を同じにした仲間とこれからも頑張っていきたいと思ひます。